

都道府県別賞一等

想いをつなぐ生命保険

鳥取県 米子市立尚徳中学校 三学年

小椋 敬介

ポキンと音がした。

「動くな。」

審判をしていた父の大きな声がした。僕はうつ伏せに転がりそこから動けなくなった。痛い、何が起きた、痛い、どうなる、色々な想いが一気に巡った。そして、涙がドバツと出てきた。

野球の練習試合だった。僕は一番バッター、打球はセンターに飛んだ。二塁を踏み三塁へ勢いよくスライディング。ベースに当たった足がポキンといった。初めてのケガだった。

その日は、遠方から祖父母が初めて試合を見に来ていた。足がすごく痛かった。だけど、それ以上に、応援に来ていた祖父母や家族に申し訳ない気持ちになり胸が痛かった。

僕は救急車で病院に運ばれた。診断は左足関節内果、外果骨折。手術のため入院となった。何もかもが初めてだった。寝ている僕の横で、医師が母に説明をしていた。母が「走れますか、成長に影響しますか」と聞いていた。「色々影響は出るかもしれない、手術してみないとわからない」と言われていた。その日の晩、母は僕に付き添って病室に泊まった。僕が痛がると、丸まる僕の背中を何度もさすってくれた。

手術はすぐにはできなかった。しばらくして、母が生命保険会社に電話していた。返事をしながら少し泣いていた。僕がどうしたのかと聞くと、生命保険会社の方の

「大丈夫ですよ。」

の言葉に思いがけず涙が出たと言っていた。僕がケガをしてからずっと、母が誰かに言って欲しかった言葉なんだなと思った。

僕はその日、生命保険の役割と必要性を実感した。突然のケガでいつもの日常生活が送れなくなった事、手術や入院で突然沢山の出費となってしまった事など、小学生だった僕でもその突然の出来事に対応する大変さは理解できた。心配して尋ねた僕に、母は「保険があるから」と話してくれた。万が一の時の備えであり、それまでの僕にはあまり関係もなく日々の生活の中では必要性を考えた事もないものであった。両親が僕の誕生後、もしもの時に困らないようにと準備していた事を初めて知った。あの日、生命保険会社の方が言った

第60回中学生作文コンクール

「大丈夫ですよ。」

それには様々な意味で沢山の確かな安心感があつた。

あれから三年が過ぎ、僕はまた野球ができています。手術とリハビリと痛かった日々、両親と過ごした病室での日々、生命保険という備えが不安を少なくし、僕達の方が一を支えてくれた。僕は自分が大人になったら、両親がしてくれたように家族のために生命保険を考えていきたいと思つている。両親が教えてくれた想いを同じようにつないでいきたいと思つている。